

# 大学を取り巻く状況と大学図書館の役割

## 講義要旨

(2012年10月2日, 大学図書館職員短期研修【京都会場】)

竹内 比呂也

千葉大学附属図書館長, アカデミック・リンク・センター長, 文学部教授

### 1. 背景

今日, 高等教育の変革に対する社会の期待は高まっている。2012年6月に文部科学省によって発表された「大学改革実行プラン: 社会の変革のエンジンとなる大学づくり」は, 我が国が, 少子高齢化, 地域コミュニティの衰退, グローバル化によるボーダレス化, 新興国の台頭による競争激化に直面していることを踏まえ, 持続的に発展し活力ある社会を目指した変革が必要であるとしており, そのために大学は社会の変革を担う人材の育成, 「知の拠点」として世界的な研究成果やイノベーションの創出など重大な責務を有しているとの認識の下に, 国民や社会の期待に応える大学改革を主体的に実行することが求められていると述べている。必要な改革の方向性は, 大学の機能の再構築と大学ガバナンスの充実・強化である。それにより, 生涯学び続け主体的に考える力をもつ人材の育成, グローバルに活躍する人材の育成, 我が国や地球規模の課題を解決する大学・研究拠点の形成, 地域課題の解決の中核となる大学の形成など, 社会を変革するエンジンとしての大学の役割が国民に実感できることをめざしている。

大学図書館は本来, 大学における研究, 教育を支援するための知識を蓄積し, 必要に応じて提供する機能を有してきた。上記のような大学の変化に対して, どのように対応していくべきなのであろうか。このことを考える上でもう一つ重要な点は, このような大学の変化だけではなく, 大学図書館がこれまで扱ってきたメディアにかかわる変化である。メディアの電子化とインターネットを介して入手できる情報量が格段に増えており, 例えば電子ジャーナルは2000年前後の本格導入から10年を経て完全に定着したとあって良いだろう。米国のUniversity Leadership Councilが2011年に公表した『大学図書館機能の再定義』においても示されているように, 伝統的な図書館サービスに対する需要は減少しているし, 資料の電子化, 予算削減, 職員数の減少などの影響を受けたサービスポイントの減少は北米の研究大学における図書館に共通して見られる傾向である。

### 2. 研究の強化と大学図書館

研究活動における国際競争力の低下が大きな政策的課題となっているが, 我々の立場では, 研究基盤としての学術情報流通の変化と大学図書館の役割を検討する必要がある。我が国の大学図書館は研究基盤としての外国雑誌の共同利用(相互貸借)を1920年代から模索してきた。1980年の学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」に沿って構築されてきた学術情報システムは, 分担目録作業に基づく総合目録の形成とそれに支えられた図書館間相互貸借による研究情報提供を我が国の学術研究の下支え

としてきたということが出来る。これは学術情報が冊子体でのみ存在していた時代には十分意味を持っており、少なくとも 2000 年前後までは「学術情報システム」というシステムは大成功を収めてきたということが出来る。しかしながら、電子ジャーナルの急激な普及とそれにとまなうビッグディールによって、各大学における利用可能タイトルが大きく増加したなかで（しかも、それによって、多くの大学図書館では来館利用者の減少に直面した）、外国雑誌に対する ILL 依頼件数は激減している。学術コンテンツの電子化の動きに対応して、大学図書館がどのような形で研究に必要な情報資源の蓄積と流通にかかわっていくのかというのは大きな検討課題であるが、機関リポジトリのような大学で生産される学術情報の蓄積と発信に係る実践的活動が図書館として行いうる一つの活動であるのは間違いない。しかしながら、今後データを中心とした新しい科学がうまれようとしている中で、研究データそのものが学術情報として流通されるようになったとき、図書館は何らかの役割を担い得るのだろうか。特に、データの扱いは研究活動そのものとより密接につながっているため、情報仲介者としての図書館の介入は難しくなるのではないかと思われる、研究活動における図書館の役割は相対的に低くなると言わざるを得なくなるのではないだろうか。

### 3. 学習・教育の改革と大学図書館

日本の大学図書館は、新制大学の発足以降、教育および学習に資するための環境の整備につとめてきた。これは 1950 年代のレファレンスルームの設置にはじまり、指定図書 of 拡充(1960 年代)、情報リテラシー教育の発展(1990 年代)、ラーニング・コモンズの設置 (2000 年代) と、その時々 of 米国の大学図書館の動向をフォローする形で続いてきた。しかしながら、このような図書館の努力にもかかわらず、高等教育を提供する側では必ずしも学習・教育における図書館の活用を意識してきたとは言えず、高等教育に関する政策的な文書で、図書館について言及されることはほとんどなかった。2008 年 12 月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」以降、アクティブ・ラーニングの推進や単位の実質化 (=学修時間の確保) のための具体的方策が活発に議論されるようになり、文部科学省の一連の助成事業(GP)を通じて大学図書館を使った学習支援の試みがなされるようになるなかで、図書館へ関心が向くようになったと言える。さらに中央教育審議会大学教育部会の審議まとめ (2012 年 3 月 26 日) や上に述べた『大学改革実行プラン』 (2012 年 6 月)、そして中央教育審議会答申 (2012 年 8 月 28 日) の中で、大学図書館機能の強化の必要性について言及されるようになり、学習の質を高める上で図書館のもつ役割が認められるようになった。

このような環境下で、千葉大学が 2011 年度から実現に向けて取り組んでいるアカデミック・リンクは、今日の大学に対する社会的要請に対する千葉大学としての回答の一つであり、また、これからの大学図書館の在り方をしめす一つのモデルということができよう。科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会による「大学図書館の整備について (審議のまとめ) -変革する大学にあって求められる大学図書館像-」 (審議のまとめ, 2010 年 12 月) に示されている学習支援、教育への直接的関与を実現しつつあるともいえる。

アカデミック・リンクは、自ら課題を発見し、それを解決できる能力を持ち、今日の知識基盤社会を生き抜くことができる人材を養成してほしいという要請に対して、図書館機能をベースとして新しい学習環境を構築し、それを通じて学生のアクティブ・ラーニングを推進しようとしている。より具体的には、「学習とコンテンツの近接による能動的学習の促進」を当面実現すべき課題としており、学習・教育に必要な「コンテンツ」、コンテンツの作成・提供のための「(情報通信)技術」、そして「教育そのもの」という、知識基盤社会において教育改革を実行するために必要な三つの要素をその基礎としている。これは提供側の視点での説明であるが、学生の側から見れば、アカデミック・リンクとは、自由に学習を行うことができる快適な空間、そこで利用するコンテンツ、そしてそこでの学びを支える人的サポートが有機的に結合し、なおかつそれらを自在に手に入れることができる場所であり、機能である。これら三つの要素の組み合わせは、具現化の方法こそ各大学の置かれた状況によってことなるものの、これからの高等教育における学習を支える基本であり、大学図書館の役割として普遍性を持つものと言えるのではないだろうか。